

完全習得学習に基づく臨床実習指導の実際

瀬川睦子 大久保仁司 松浦純平
奈良県立医科大学看護学科

The Clinical Practice Education Based on The Mastery Learning

Mutsuko Segawa Hitoshi Okubo Junpei Matsuura
Faculty of Nursing School of Medicine, Nara medical University

キーワード；成人看護学実習 完全習得学習 実習目標と評価 実習場面 指導場面

I. はじめに

教育は学習者がある意図に基づいて変容・発達させることで、その意図する内容をもった望ましい姿を育むことを目的とし、目的を具体化した目標の設定と学習者の変容を確かめることが必要となる。そして、学習者の変容のしかたを教育の成果として確かめるためにその過程を科目の目標や行動目標にフィードバックさせる教育評価が重要である。

看護学教育において教育作用を成り立たせる因子は多様である。教育者個々が学生に直接関わる実習指導等の教授・学習活動もその要因に影響されて成り立っていると考えられ、教育目標の設定のしかたや教育の過程及びその評価・評価基準に対する考え方の違いとなってあらわれることは当然のことと云えるだろう。看護は人を対象にしており、人間形成を重視する考え方、看護の実践力を重視する考え方、また、理論の学習をしておけばその他は応用であるから理論を十分に学ばせておけばよいとする考え方など様々である（田島桂子 1999）。

本学科成人看護学領域では臨地実習において看護の実践力が備わることを目指して実習の目的・目標・方法等の設定について教員間で意見交換しながら検討し教授・学習内容の精選を行っている。学

習内容を明確にすることは教授・学習活動の視点及びそれに関係する周辺の内容との位置関係が分かるようにすることでもある。実習の單元ごとに目的・目標を設定し評価方法も含めて学生に示すことで教員と学生が教授・学習内容を共通認識のもと共有して実習展開していくことになる。本領域では、急性状況にある患者への看護を一つの学習のまとまりとして単元化し成人看護学実習Ⅰとして位置づけている。更にもう一つ、慢性状況にある患者への看護を一つの学習のまとまりとして単元化し成人看護学実習Ⅱとして位置づけし、それぞれの学習内容を精選している。

目的・目標・細目標及び評価目標の設定は、学習に時間をかければできない者はいないというキャロル（j. A. Carroll 60年代）が提唱した考え方をブルーナー（J. S. Bruner）やブルーム（B. S. Bloom）らが発展させた学習指導理論に基づくものである。つまり完全習得学習（マスタリーラーニング）の考え方を導入したもので、まず教育目標を具体化し、それを教育者・学習者が共有して教授・学習過程を系統化し、その過程において学習の達成状況を評価するということになる。ある意図する領域の目標を確実に達成するために学習し、その学習者全員が目標

達成することを期待して学習過程が作られるので、目標達成したかどうかの評価は到達度評価ということになる。そして当然、学習者一人ひとりの絶対評価であるから、看護学教育における実習指導とその評価は学生個々に対して教授・学習活動の過程を目標にフィードバックして行われることになる。

今回は、筆者らが実習指導で直接関わった事例（学生）の教授・学習活動の過程をフィードバックした。そして学習者の課題とその課題をどのように指導して目標達成へと導いたのか、その指導は適切で効果的なものだったのかを評価し、青年期にある学生への関わり方や、教員のあり方も含めて検討した。更に、より効果的な指導の在り方について模索しこれからの教育活動に生かせるように取り組んでいきたいと考えている。

II. 成人看護学実習の目的・目標

1. 実習目的

成人看護学概論、成人看護学援助論 I・II および既習の知識・技術を看護場面に活用し、現実の諸現象や諸過程の探求を通して看護の目的を明らかにするとともに看護の本質の理解を深め、状況に応じた適切な行動を判断し、選択できる能力を養う。

2. 実習目標

- 1) 成人期にある対象とその家族を総合的に理解する能力を養う。
- 2) 看護の実践過程を科学的に思考し、状況に応じた適切な判断力を養う。
- 3) 生命の尊さへの理解を基盤とした行動の選択ができる能力を養う。
- 4) 看護実践の過程を通して、看護の知識・技術を開発し応用する基礎的能力を養う。
- 5) 保健・医療・福祉等の関連職種のパートナーと協働する能力を養う。

- 6) 看護実践に関心をもち、自己の向上のために常に研究する態度を養う。

3. 単元・成人看護学実習 II（慢性状況にある患者の看護）の目的・目標

目的

成人期の慢性状況にある患者およびその家族の健康生活の維持・安定に向けて、生活を調整し QOL(Quality of Life)の向上を図るための基礎的能力（知識・技術・態度）を養う。

目標（一般目標：GIO）

GIO: General Instructional Objectives

- 1) 慢性状況にある患者が療養法を理解し、生活様式を再構成するための援助ができる。
- 2) 慢性的な健康障害の状態に応じた援助ができる。
- 3) 患者への包括的アプローチにおける看護の役割を理解できる。

III. 教授・学習活動の実際

2つの事例の実習場面について、学生個々の課題に対する教員の関わりと学習者の目標達成への指導過程をフィードバックし、考察する。

<検討する事例学生への倫理的配慮>

実習中の場면을再構成したり、レポートや実習記録等の資料の取り扱いに際し、プライバシーを守ること、取り上げることでより学生の不利益とはならないこと等を説明し了解を得る。

1. 対人関係困難な患者への関わりに自信がもてず、消極的になった学生に対する指導の実際

1) 学生の特徴

本学生が実習要項で示された目標を踏まえたうえで、自己の実習目標として挙げたのは以下の3点であった。①ターミナル期にある患者の心理を理解する。②患者、家族の疾患に対する想いを理解す

る。③慢性疾患により変化した患者・家族の役割を理解する。であり、その実習目標達成のための自己課題として特に、患者の訴えをしっかりと傾聴すること、患者の家族と関わることを重点的に挙げていた。これは一般的な実習目標の達成に向けてこれから実習展開していく上で、受け持ち患者決定後、ある程度患者の特徴が分かった時点で自己の目標を明確化させているものである。つまり、実習目標(G I O)の1), 2), 3)の細目標である個別行動目標(S B O : Specific Behavioral Objectives)は以下に記す内容である。

- *療養方針に関する患者の反応を理解し、説明できる。
- *慢性的な身体症状による変化について述べられる。
- *長期にわたる療養中の患者の家族が果たしている役割について述べ、家族の想いを傾聴することができる。

これらの細目標を包含して捉えた上での自己目標を挙げて取り組んだ。

実習当初から受け持ち患者は「ひとりになりたい」と言っており、学生はなかなか患者のもとへ行くことが出来ず、患者の訴えや想いを確認出来ないでいることに焦りを感じていた。どうしたらいいのか分からないと訴え、スタッフステーションに居ることが多くなった。

2)受け持ち患者の状況

患者：60歳代，男性，

家族：妻と2人暮らし（息子2人、孫2人）

診断名：原発性肺腺癌（StageIV）。

今回の入院では精査の結果、患者と妻、次男に対して、肺腺癌のステージ（IV）で生存中央値8～10ヶ月であると説明がなされた。いわゆる病名・余命告知に関するインフォームドコンセントであった。本人は、当初経済的な問題から、入院をかたくなに拒否していたが、家人と医師の説得に応じ、化学療法と放射線療法を

目的とする入院となったケースであり、入院後1週目に本学生の受け持ち患者となる。

A D L（Activity Diary Living）は自立していたが、カーテンを閉めきり、同室者ともほとんど会話をせず、ふさぎこんでいることが多かった。そして、呼吸状態は安定していたが、歩行時など呼吸のリズムが乱れていた。患者は自分の考えをなかなか変えようとしめない頑固なところがあった。

3) 目標到達に向けた指導の実際

学生は、患者に関われないことを自分の側に何かまずい点があつて、自分の責任だと思うようになり、消極的になってしまっていた。このことに対し、まず、身体的な面をしっかりとアセスメントするように指導した。つまり、呼吸機能とは何か、そして、それを確認するためにはどのような情報が必要かを既習学習にフィードバックさせ、その上で現在の患者の呼吸の状態かどうかを判断する。そして、そのことが患者の生活にどのように影響しているか、またどのような苦痛を感じているかを観察し、情報を得るようにアドバイスした。（O情報・S情報の分析・統合⇒機能障害と日常生活に関するアセスメント）

次に、患者に行われている化学療法と放射線療法がどういうもので、どのような効果が期待できるのか。その反面、どのような副作用が起こり得るのかを考えることを指導し、そのうえで確実なバイタルサイン測定の必要性を理解させた。そしてそのことは重要な看護活動の一つであることを認識させた。このように現段階では主に観察とコミュニケーション技術による看護過程の展開であった。併せて何故患者は1人になりたいと言っているのか、更に、言葉だけに着目するのではなく、患者のふさぎこんでいる様子の意

味を考え、余命まで含めた癌の告知を受けて間もない状況を看護者としてしっかり受け止めていくことの必要性を考えさせた。更に、死の受容過程についてどのようなプロセスを辿るのかをフィードバックさせ、現在の患者の心理状態について理解できるように指導した。

学生が関わり方のまずさから情報が得にくくアセスメントが出来ないということに対して、患者の現在の状態を少しでも改善し、心身を安楽にするための援助に必要な情報は何か、その情報の意味(必要性)は何なのかを考えるようにアドバイスし、客観的に整理をさせたうえで、カルテ上の記録だけでなく、スタッフとの情報交換によっても得られる情報を活用するように指導した。

また、学生が挙げた自己の実習目標に、行きつ戻りつしながら、その目標を達成するためには、これまでの既習学習の知識がいかに重要であるかに気付くように指導した。このように関わったことで、学生はバイタルサイン測定的重要性、つまり、客観的な測定値の意味をアセスメントすると同時にそれに伴う患者の反応その他の状況を理解した。心身の状態についてアセスメントができたことから、患者が「ひとりになりたい」と言っていたのは学生への拒否反応ではなく癌を告知されたことに対する反応であることを納得できた。また初回化学療法と放射線療法に伴う深刻な副作用による苦痛が、患者の生活面のQOLを奪っていく可能性を踏まえて、専門的視点で全身状態の観察を行う必要がある。学生は今後おこり得る問題を予測してケアしていくことの必要性に気付く事が出来た。その後、徐々にではあるが患者のもとへ行くことに躊躇することなく積極的に行けるようになった。患者もまた表情が緩み、落ち着いた対応をしている様子が伺えた。

4) 考察

今回の学生の受け持ち患者は、病名と余命について告知されて間もないという時期であり、患者の精神面での問題が大きく、20歳代の青年期にある学生が看護者として関わっていくうえで難易度の高いケースだったと思われる。学生は当初、患者の「ひとりになりたい」という発言にショックを受け、自分の未熟な関わり方のせいで拒否されたと思い込んで援助の方向性を見出すことが困難な状況であった。そこで、まず現在の状況を客観的に観るようアドバイスし、身体的な側面に目を向けるように指導した。身体面から患者の置かれている現実的な状況を考えさせた。そのうえで、精神的、社会的側面をも踏まえたアセスメントを促したことで、自分のことも含めて客観的に理解することができたのではないかと考えられる。だからその後は少しずつではあるが、患者のもとへ目的を持って積極的に行ける様になり、コミュニケーションもうまくできるようになったのだと思う。そして、ターミナル期にある人の看護を実習として経験したことは、自己の実習目標(課題)として挙げていた①ターミナル期にある患者の心理を理解するという点において学習が深まり、『患者の訴えをしっかりと傾聴する』という個人的な課題についても学習できた。そのことから、療養方針に関する患者の反応を捉え、精神心理面を理解するという実習目標の達成がより可能になったと考えられる。青年期の学生だから精神面の関わりは難しいと思われるが、身体面へのアプローチから入り、気持や心理的变化にも徐々に目を向けるように留意して関わっていくことで客観的に捉えられたと思われる。

教員としても、現場の状況や自分自身の関わり方を客観的に捉え、専門的に判断する能力や実践する能力を養うための

教育・指導について、あらゆる場面をと
おしてフィードバックすることの重要性
について改めて気付かされた。

2. 患者の安全に対する援助において 看護技術面での課題をもつ学生の 指導の実際

1) 学生の特徴

学生は実習が始まる前に実習目標を達成するための課題として、以下の目標を挙げていた。①患者と関係を築くことができる。②バイタルサイン、検査データなどの客観的情報を理解しアセスメントに活かせる。③健康障害による身体的変化を、観察を通して把握できる。④生活行動様式に沿って分析・統合し、アセスメントを行うことで優先順位を決定できる。⑤安全安楽をどのように保つか、留意事項に盛り込み実行できる。⑥患者の個別性に留意し援助を行える。の6つである。その中でも、5番目に挙げている患者の『安全安楽をどのように保つか』に留意した看護実践ができるように実習展開して行くうえでの大きな課題が看護援助の技術面にあった。これらの自己目標は主に以下の細目標(SBO)を包含して捉えたうえで考えたものであった。

* 慢性的な身体症状による心身の変化が述べられる。

* 症状コントロールを妨げる原因・要因を把握し、援助方法を説明することができる。

* 療養法に対する指導の目標・内容・方法、指導上の留意点を盛り込んだ計画を立案できる。

* 患者のセルフケアニーズに基づいて生活の援助ができる。

などである。今回、学生が受け持った患者は、下肢筋力低下の著明な疾患であったために転倒のリスクが非常に高く、援助行為時の技術面の学習を十分にしている必要があった。

2) 受け持ち患者の状況

患者：70歳代後半、男性、
家族：妻7年前に他界。現在、長男夫婦、
孫4人と暮らしている。

診断名：多発性筋炎。全身倦怠感が著明で、両大腿部に筋把握痛が出現し、歩行器を使用するようになる。運動機能に障害があり、活動面に問題のある患者である。現在の活動状況は、下肢筋力低下が著明であり、立位保持2分間程度可能。移動は車椅子使用である。

3) 目標達成に向けた指導の実際

本学生の場合、実習要項に挙げた実習目標(GIO)の「慢性的な健康障害の状態に応じた援助ができる」の項目のうち、細目標である個別行動目標(SBO)として含まれている3番目の「症状コントロールを妨げる原因・要因を把握し、援助方法を説明することができる。」が該当する目標であり、そのための学習が課題であった。

学生が受け持ったのは、下肢筋力低下が著明にみられる70歳代後半の男性患者であった。実習を進めていく中で、患者がベッドから車椅子へと移乗する介助の際に、ベッドに横付けした車椅子の真後ろに学生が立っている状況が見られた。また病棟のトイレへ患者を誘導する際に、便器に患者が移乗する動作時に車椅子の後ろに立って介助をする光景がしばしば見られた。学生は緊張と焦りの気持が強く、安全な介助について頭では分かっているが、自分の動作を客観的に見極められないという状況であった。このような状況では患者が転倒しそうになっても学生は即座に対応できず、転倒を防ぐことは困難であるということが予想された。援助行為実施時には、必ず教員や指導看護師が傍にいて咄嗟に対応できる状況の下で実施するように指導した。

患者は、立位保持が2分間程度可能で

あったが、下肢は筋力低下により立位動作時にはかなり震えており、いつ転倒してもおかしくない状況であった。患者自身も転倒してしまう恐怖心から怒鳴ることもあった。そのため、実習1週目には実習時間終了後に教員と2人で成人看護学実習室にて、基本的な技術の練習を行った。ベッドから車椅子への移乗の実技を実際に練習して、再度移乗の手技を確認し直した。その翌日から徐々にではあるが、学生には患者の転倒への配慮が見られ始めた。具体的には、移乗介助時の学生の立ち位置、ベッドサイドでの車椅子の位置、ブレーキの確認、必要な声掛け等で学生自身の危機意識も明確になり、改善の行動がみられた。

4) 考察

成人看護学領域の臨地実習の目的・目標は学生の看護の実践力が備わることを目指しており、できるだけ学生の到達レベルを設定目標に近づける様に持っていく事が、教員の使命と考える。今回の学生は、患者の安全の保持を念頭に置いた基礎的な看護技術の中の移乗動作部分の知識はあるが、精神運動による移乗介助技術において安全行動がとれていなかった。転倒の危険性が高い患者への援助技術習得において不十分な面があると評価し、安全な移乗介助の技術習得の指導をした。ポイントとなる動作を学生と共に再確認し、自己の技術のどの点が不十分なのかフィードバックした。認知的に学習したことを実際に精神運動として実践的に練習することにより、翌日から学生は移乗時の介助を安全に実施することができた。学生が安全な移乗介助ができるために必要な技術を適切に駆使する事が出来、それに必要な判断力が備わるように学習が出来て実践につながっていくように指導していかなければならない。実際に実習先の病棟から帰ってきてからも

実習室で技術の練習を何回も繰り返して行ったことで、学生は少しずつ自信が持てるようになった。患者の移乗時の介助をすることにも真正面から向かえるようになり、技術として習得できたのではないかと考えられる。

教員として、このような実践的な技術の習得に課題をもつ学生に関わったことを通して、教育目標としてまず一般目標を挙げて、それを具体化した個別行動目標の一つ一つが達成されるように、教員、学生が目標を共有し教授・学習するプロセスを踏むという完全習得学習の考え方に基づく指導の必要性を強く認識することが出来た。

IV. 総合考察

教員は実習目標に挙げている一般目標や個別行動目標を学習内容として、看護行為の実践として学習させる実習の指導を行っている。完全習得学習理論（マスタリー・ラーニング）に基づく考え方はその単元の学習目標を設定し、細目標化して個別行動目標のレベルで出来たか出来ないか、云えたか云えないかという学生の明確な行動を主とした評価が出来る。即ち学生の行動（反応）そのものによって到達度を評価出来るものである。

更にその目標設定では、実習は看護の実践の学習であるから、専門的な知識の習得はもとより、生活面の援助の技術や診療に伴う医療行為的な技術の習得も必要とする。従って、目標分類（Taxonomy）による3領域からの教育目標として挙げる必要があり、特に看護過程の展開は思考過程そのものと看護実践行動としての技術の習得が重要である。

看護は実践活動或いは患者の看護上の問題予測や計画立案及び実践結果に対する評価までの系統的・論理的な思考活動と看護行為としての実践そのものが展開されるのだから、認知領域はもちろん重

要で、精神運動領域及び、情意領域からの目標も同じように重要である。

学生指導の実際において目標にフィードバックして検討する際にも、成人看護学実習全体の目標はもとより実習単元の目標設定では3領域からバランスよく抽出するように留意して設定している。今回取り上げた2事例においても、その中のどの目標に対する学習上の課題であるかを明確にすることで、目標達成するためにどのような学習を必要とするか分かりやすく、学生へのアドバイスや指導の実際に即つながっていった。つまり目標達成に向けて指導上の課題を見出すという形成評価をしつつ進めて行くことである。

実習指導では、青年期の学生が少ない人生経験や社会的経験の中から、経験豊富で複雑な社会的背景をもつ患者への援助をして行くのだから、指導上の配慮が重要で、情意的な面の理解にも留意する必要がある。専門的な判断が出来て、看護計画の立案が早々に出来れば良い、つまり認知レベルの学習に長けていれば良いというものでもない。病室における看護行為の実践面で技術の駆使は十分か（精神運動領域）、必要な配慮は出来ているか（情意領域）、と3側面からの指導に留意し論理的に捉えていけば学生の課題も見出しやすく、フィードバックしやすくなる筈である。つまり、日々の指導そのものが形成評価である。

看護学教育は学科の教育理念に基づいて教育課程が展開されるが、臨地実習ではその高邁な理念を具現化し、体験的に学ぶことで、机上の理論学習では得られない多くの尊い学習成果が得られると思われる。日進月歩する医療現場の変化にも対応できるように日々取り組んでいるが、看護教育の課題は多岐に亘っており、まだまだ研鑽を重ねて教育活動を展開して行きたいところである。

引用文献

- 1) 田島桂子著(1999)：看護教育評価の基礎と実際, Pp25, 医学書院.

参考文献

- 1) B. S. ブルームほか編著, 梶田叡一ほか訳(1978)；教育評価法ハンドブック－教科学習の形成的評価と総括的評価, 第一法規.
- 2) B. S. Bloom et al (1976) Taxonomy of Educational objectives The classification of educational goals, handbook 1, Cognitive. Domain London, Longmans
- 3) 橋本重治(1987):新教育評価総説(上巻), 金子書房.
- 4) J. S. ブルーナー著(1995):鈴木祥蔵, 佐藤三郎訳；教育の過程, 岩波書店.
- 5) MARILYN. H. OERMANN, KATHLEEN. B. GABERSON:Evaluation and Testing in Nursing Education:舟島なをみ監訳, 亀岡智美他訳(2001)：看護学教育における講義・演習・実習の評価, 医学書院.
- 6) 田島桂子著(2002):看護実践能力育成に向けた教育の基礎, 医学書院.